

東京双松会会報

発行 東京双松会事務局 (中央印刷事務器株式会社内)
TEL:03-3265-4858 FAX:03-3265-4859 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
印刷 中央印刷事務器株式会社 本社:☎102-0084 東京都千代田区二番町11-3

世界を揺るがす“TRUMP”の怪

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

東京双松会会員の皆様、ご健勝のことと存じます。今回、会報第8号の発行に際し、会長としてご挨拶申し上げます。

まず最初に、松江北高校出身者の動向についてです。過日、新聞に掲載された官庁人事を読んでおりましたところ、国土交通省事務次官に毛利信二様が発令されており、島根県出身となっております。ひょっとして、と思い、出身高校を調べたところ、案の定松江北高校でした。私が海運業界に身を置いていることを差し引いても大変感慨深いものがあります。また、同じく、日経新聞を読んでおりましたところ、交遊抄の欄でカゴメ社長の寺田直行様が寄稿されておりました。氏も松江北高校であり、30名程度の規模の「賢人会」を主催されていらっしゃるとのことでした。この他にも、間違いなく様々な場で活躍されている松江北高校出身者がいらっしゃると思います。

さて、話題はがらりと変わりますが、世界政治経済情勢について感じていることを述べたいと思います。今年のお正月に、今年一年間どうなるかと考えましたところ、最大の不安定要素はトランプ (TRUMP) であると思に至りました。もちろんトランプ大統領その人自身のことでもありますが、そのスバルがそれぞれ大きな不安定要素の頭文字を示しています。

最初のTはテロリズムのTです。ISの最大拠点モスルが陥落し、テロの根源が大方除去されたかの如く見えますが、実はそうではないと思います。欧州の昨今の相次ぐテロを見ていると、以前のような宗教性、組織性、専門性が感じられずアマチュア化、あるいは衝動化しているとの専門家の指摘があります。また、テロリストの多くは比較的裕福な高学歴の若者が多いとも言われています。

また、テロリズムの思想がネットで迅速に拡散し若者が洗脳されるという面も見逃すことはできません。組織性のあるものには比較的情報にアクセスし易く、対応が取られますが、個人的な行動を取るものは予測が難しく、対応も後手後手になります。しかし東京オリンピックが近付いていますので世界の人々から賛美されるような立派な大会とすべく、その対策を万全なものにしておく必要があります。

二番目のRはエクステンジレート、インタレストレートのRを意味しています。リーマンショック以降、各国中央銀行が量的緩和を進め低金利政策を取ってきました。ここに来てその二つの方針について見直しが行われております。FRBも15年、16年と毎年1回利上げをし、今年もこれまでに2回利上げをしています。また、量的緩和の見直しも併せて進め

られようとしています。今後、これらの動きが二つのRatesにどのように影響していくかを注視して行かなければなりません。幸い日本に関しては極端な円高が是正され、110円近辺で落ち着いていますし、金利も当分は上がる気配はありませんが、何が起るかわかりませんので注視しておく必要があります。

三番目のUはユニラタリズム (一国主義) のUです。第二次世界大戦後、米国はボックスアメリカナ (米国指導の平和) の下で世界秩序の維持、グローバリズムを進めてきました。

しかし、今や米国は世界のリーダーの役割を放棄し自国第一主義の道に踏み出しました。すなわち、国際協調主義の放棄です。それによりTPP、パリ協定からの離脱を目論んでいます。このことを称してリーダーのいない世界、すなわち、G7からG0になったとも言われています。今後、リーダーなき世界がどのようになってゆくのか大変心配されます。日本も米国依存のマインドを組み立て直し、自立心の樹立が急務です。

四番目のMはミサイルのMです。北朝鮮が矢継ぎ早にミサイルを発射しております。その裏を勘ぐってみますと、北朝鮮のトップは自身の生命及び体制の維持について大変恐怖心に近いおびえを抱えていることの裏返しではないかと思えます。

交渉相手は韓国などではなく、米国だと。その米国に先の二つのことを保障して欲しいと狙っているものと思われる。経済規模ではわが島根と同じですが、その様な国が核も既に20発近く、ミサイルも数百基を持ち、国家のトップが恐怖心に駆られているということは極めて危険なことです。いかに日本を守るかを真剣に考える時機に来ていると思えます。

最後のPはポピュリズムのPです。元々、ポピュリズムという言葉は1890年代に米国で生まれたものです。経済不況、それに対し既存の政党がきちんと対応出来なかったことに対し民衆を煽る人民党というのがその始まりです。その後、1930年代の不況期にもドイツ、イタリアでポピュリズムの全体主義が登場し、世界を破局に追い込みました。近年ではリーマンショック以降にポピュリズムが出てきました。ポピュリズムは確たる信念、理想に基づかず、その都度大衆に



受ける動きをするのが特徴です。

ポピュリズムで失敗した典型的な国はチャベス政権のベネズエラです。ベネズエラは石油収入のみに頼り他の産業の育成を怠り、且つばらまき政治を行ったため、石油価格が下落した現在、経済的に大苦境に陥っています。将来を見据えた国家の基軸、その基となる私達個人個人の考え方、生き方が問われていると思います。

以上のような国際情勢の下で日本は内に籠ったように、国会議論及びマスコミの取り上げるテーマが国家の根幹から離れた問題に集中する嫌いがあります。国際的にはリーダーのいない世界情勢の中でどのように確たる外交方針を以て挑む

か、そして、日本が向かう少子高齢化社会への対応をしっかりと考えるべきだと思います。

最後に、最近発表された九州大学の馬奈木教授が発表された新国富論が興味を引きました。従来のGDPに代わり4つの資本構成で見ると日本の一人あたりの富は米国の27万ドルをわずかに超え、28万ドルと指摘されております。このような分析も極めて有意義ではないかと思えます。日本が意外とバランス良く発展して来たということだと思います。将来も国と地方がバランス良く発達することを切に望んでいるところです。

(株式会社 商船三井 相談役)

平成28年度総会報告

平成28年10月15日(土)、秋晴れのもと、第61回総会及び懇親会が母校、双松会、近畿双松会からの来賓を迎え盛大に開催されました。当日は、ふるさとのマープルテレビの取材や会場撮影もあり、華やかな雰囲気の中で会が進みました。

本田久子さん(S60年卒)の軽快な司会で始まった総会では、中村康一事務局長(S40年卒)の開会の辞に続き、芦田昭充会長(S37年卒)が登壇され、続いて来賓を代表して母校の泉雄二郎校長(S50年卒)、勝部昌幸双松会副会長(S45年卒)から挨拶をいただきました。



泉雄二郎校長

芦田会長は挨拶の中で、6月に行われた日本陸上競技選手権大会で母校の福田翔子選手が800メートルで見事優勝を飾った話題から始まり、松江や島根県絡みのスポーツ選手の活躍振りを詳しく述べられた後、スポーツに限らず母校にはいろいろな分野で活躍する人材を輩出するベースがあると話されました。

泉校長は、今年母校が創立140周年を迎え、11月12日に開催される記念式典では魅力ある各種イベントを用意しているので、是非皆さんの参加をお願いしたいとの話に続き、スポーツ系・文化系にわたる母校生徒の活躍を披露され、最後に北高が島根県のリーディングスクールとしての存在感を高める必要があるとの決意を述べられました。

勝部副会長は、まず昨年の「北高の緑を守る基金」と今年度の「世界の人たれ北高基金」への心のこもった寄付に謝意を示された後、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」で雑誌編集長役として登場する花山伊佐治のモデルになった花森安治と松江の関係を、彼が「暮しの手帖」に寄せた文章を引用しながら紹介されました。

来賓挨拶が終わったところで、中村事務局長より27年度活動報告、矢田修治会計担当(S46年卒)の会計報告、宮城由美子監事(S53年卒)の監査報告があり、満場一致で承認されました。

続いて、東京中央日本語学院講師の森田六朗さん(S38年卒)による、「近くて遠い国——中国で12年暮らして」と題する講演に移りました。

森田さんは、北京の大学で日本語教師を勤めるかたわら、中国の若者に剣道を指導してこられた12年間の貴重な体験や実生活を通して得られた視点から、「中国の風土と習慣」「日中の文化的差異」など、大変興味深いテーマを本音で

語っていただきました。

講演が終わり、懇親会に移りました。今回は石倉義朗顧問(S30年卒)の元気いっばいの音頭による乾杯に始まり、いつものようにたちまちにして座が和み、テレビ撮影が行われていることも忘れて、あちこちに懇談の輪が広がりました。

最後に大岩篤郎幹事(S42年卒)のリードで「赤山健児の歌」「山脈浮かびて」を大合唱し、原靖雄副会長(S33年卒)の閉会の辞でお開きになりました。(総会・講演・懇親会の模様は東京双松会のホームページに詳しく掲載されています)(文責・田中稔=S40年卒)

「ゴルフコンペに参加しませんか？」

東京双松会では、会員相互の交流を目的としてゴルフコンペを開催しています。

昨年12月の第6回目に続き、今年6月には第7回目を鶴舞カントリークラブにて開催し、快晴のもと和気あいあいと楽しい一日を過ごす事ができ、古川陽道さん(S40年卒)が優勝されました。

気になる実力は?といたしますと、相変わらず芦田会長がダントツですが、第6回から参加頂いている井原勝美さん(S44年卒)を始め何人かの方は芦田会長の好敵手として実力を発揮して頂いております。その他は?といたしますと、私を象徴とするもっぱらエンジョイゴルフファアの集いも同時進行といったところでしょ? (笑)



平成29年6月3日、
鶴舞カントリークラブにて



懇親パーティでスピーチする芦田会長

こちらは気にならないかもしれませんが、各賞には毎回地元島根県名産品をご用意した、幹事特権による参加賞重視の景品構成になっております。

今年は第8回コンペを11月か12月に開始する予定です。

まったく気取らない気軽な集まりですので、皆様お気軽に同級生ご家族とご一緒に参加していただけることを願っております。

参加希望、お問い合わせは下記連絡先へご連絡ください。
tokyososhokai.golf@gmail.com

報告：コンペ幹事 高根護康(S55年卒)

ふるさと巡り IN 東京

不思議な“真夏の夜の夢”……『怪談』

雨が降り続いた8月前半、「小泉八雲」と「怪談」をキーワードにした番組が3本、なぜか立て続けに放映された。NHKBS103では「美の壺～小泉八雲 怪談～」と「Cool Japan : Kaidan」、BS日テレでは「荒俣宏の見えないものを見に行く旅～神々と妖怪の地 出雲～」の3本だ。

ハーン最晩年の著作『怪談 KWAIDAN』は、亡くなる5カ月前に、アメリカで出版された(1904年)。私たちはその邦訳を手に入れているのだが、これは終の棲家となった西大久保で編まれたものだ。

「美の壺」によれば、「壺の一：魂の声を聞く、壺の二：永遠の女性像、壺の三：お化けとは何か」が『怪談』のエッセンスだという。怪談に隠された小泉八雲のメッセージを解き明かそうという試みだ。全17篇のうち、最初に登場するのは「耳なし芳一」で、ハーンは「臥遊奇談」より「琵琶秘曲泣-幽霊-」を素材に、再話文学として仕上げている。この1篇は、琵琶と語りの囁々たる響きが“通奏低音”となって、壇ノ浦の合戦の舟と舟が突進するがごとく、矢が唸りを立てて飛び交うがごとく、武士の雄叫びや舟板を踏み鳴らす音、さては安徳天皇や女官たちの哀れな最期の語りに加えて聴き手の平家の亡霊たちの泣き叫ぶ声など、音に満ちあふれた世界が描き出されている。心で観る世界が、そこにはある。

鎧兜で身を固めた武士が芳一を引き連れ、大きな門構えの前で「開門！」と叫ぶくだりがあるが、これには以下のような事情があったという。

《……「門を開け」では強味がないと云ふので、色々考へて「開門」と致しました。この「耳なし芳一」を書いて居ます時の事でした。日が暮れてもランプをつけて居ません。私はふすまを開けないで、次の間から、小さい声で、芳一芳一と呼んでみました。「ハイ、私は盲目です。あなたはどなたでございますか」と内から云つて、それで黙つて居るのでございます。いつも、こんな調子で、何か書いて居る時には、

その事ばかりに夢中になつて居ました》(小泉節子『思ひ出の記』)

西大久保での二人の共同作業は、まずセツが話の大筋を語り聴かせ、面白いとなるとその筋を書いておき、それからくわしく話す……といった手順を踏んだと『思ひ出の記』にある。二人三脚の息の合った作業が、この傑作を生み出している。

次の1篇は「雪女」。ハーンは序文で《「雪女」という奇妙な物語は、武蔵の国、西多摩郡、調布村のある百姓が、自分の生まれた村の伝説として物語ってくれたもの……》としているが、この調布村は、青梅のほうに実在する。

「雪女」の持つ破壊と再生の二面性……老人を凍死させ、若者を救い、だがその若者と結婚し、子供らと夫を慈しむ、子供ゆえに夫を存命させる……がよく現れている。永遠の母性を表すイメージは、聖母子像へとつながっているようだ。

続く「貉」では、ある商人が東京・赤坂の紀伊国坂で2度も“のっぺらぼう”に出会うという不思議。1度目は娘、2度目は屋台の蕎麦屋として……。これはハーンが6歳のとき「いとこのジェーン」ののっぺらぼうに出くわした“原体験”もあり、人間の内面の表れ、真夏の夜の“異界への旅”をモチーフにしていると思われる。

「Cool Japan」では、「怪談会」や「松江ゴーストツアー」を取り上げていた。「荒俣宏の見えないものを見に行く旅」では、月照寺の大亀像や「水船を買う女」の大雄寺、それに「神魂神社」を訪れ、天井の“九つの雲”や“神さまの乗り物”を紹介していた。

首都圏に居ながらにして故郷を旅する、不思議な“真夏の夜の夢”でした。

(文責・長谷川隆義 = S40年卒)



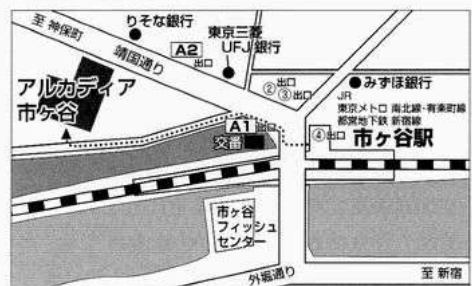
横浜上陸時のハーンの後姿 同行画家ウエルドン描く

＝平成29年度 第62回東京双松会開催のご案内＝

- 1. 日 時 / 平成29年10月14日(土)12:00～16:00
- 2. 会 場 / アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL: 03-3261-9921 (代表)
- 3. 参加費 / 8,000円(学生無料)
- 4. 申込〆切 / 平成29年10月5日(木)

■■講演*AI(人工知能)と生活・医療■■

★講演者*須藤 修(すどう おさむ)S49年卒・25期、東京大学大学院情報学環 教授*最近、AIという言葉をよく耳にします。囲碁でプロ棋士を打ち負かしたとなど、話題も豊富です。AIとはどんな技術で、私たちの生活や医療にどう貢献できるのか、何ができるようになるのか……この分野の第一人者である須藤修教授に分かりやすく語って頂きます。



編集後記

森田六朗氏の講演を文字にして表すのは、大変難しい作業でした。氏の軽妙洒脱で、緩急よろしきを得た話術と問合いは、なかなかのものでした。豊富なテーマを持った『怪談』に触れるには、枚数が足りませんでした。『KWAIDAN』の訳については、平川祐弘著『個人完訳 小泉八雲コレクション 骨董・怪談』(河出書房新社)による。 長谷川記